

主 題：和解をもたらすキリストの十字架①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章21-22a節

テーマ：イエス・キリストの十字架が成し遂げた“和解”とは？

今朝、続けて見ていきたいのは、コロサイ1：21-23のみことばです。この箇所を通して、私たちの愛する主イエス・キリストの十字架、またそれによってもたらされる和解について一緒に考えてみたいと思います。内容に入って行く前に、みことばをお読みします。きょうは21-22節を中心に考えたいと思いますけれども、23節までお読みします。

コロサイ1：21-23

「:21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあつたのですが、:22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させていただきました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。:23 ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。」

さて、今学んでいるコロサイの教会は、ある深刻な問題に直面していました。教会内に入り込んだにせ教師たちの惑わしによって、イエス・キリストに関する間違つた教えが人々の間で広がり始めていました。教会のあるところでは、こんなことばが聞こえてきます。救われたいのですか？イエス・キリストだけでは不十分です。キリストに加えて行いも欠かせません。割礼を受けたり、儀式を行ったり、食べ物や飲み物、安息日といったユダヤの律法も守らなければなりません。そうでなければ、救いにあずかることなどできませんと。また別のところでもこんなことばが聞こえてくるのです。イエス・キリストですか？確かに彼は偉大な存在です。でも真の神様ではありません、真の人でもありません。そんな方にだれかを救うことなどできるわけもなく、私たちの成長にとっても不十分ですと。こうしてにせ教師たちは教会全体を攻撃していました。正しい福音をねじ曲げて、真理を偽りに取りかえようとしていました。彼らは、キリストは救いにおいても、信仰生活においてもすべての面で不十分な存在だと教えていたのです。

当然コロサイの兄弟姉妹の間には戸惑いや不安が生じていました。彼らの信仰の土台となる部分が揺るがされていたのです。そんな現状を覚えたパウロは、それをそのままよしとはしませんでした。そんな危機的な状況にある主を愛している者たちが立ち返らなければならない真理を教えようとしていました。彼らの目をすべてにまさるイエス・キリストに、彼らが決して忘れてはならない偉大なお方の姿に向けさせていたのです。そしてそれが先々週学んだ18節から描かれていたことでもありました。文脈を思い出すために18-20節を見ると、パウロはイエス様の姿に関してこう述べていました。「:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」と。パウロはここで御子が教会のかしらであること、死からよみがえられた最高の存在だということを教えていました。人にはどうすることもできなかった最大の敵、死の力でさえも打ち破った勝利者として、圧倒的な力を持ったすべてにまさる主の姿を描いていました。やはりイエス・キリストこそすべてにまさって偉大な第一のお方だと言うのです。

パウロはそれに加えて、そんなイエス・キリストを通して、いつの日かすべての被造物が神様と和解する日がやって来ること、いつの日か罪によって壊れていたその関係が修復されて、すべてのものが例外なく偉大な主、王の王の前にひざをかがめる日がやって来ることを喜び、そのことを言い表していました。そんな希望の日は、この先必ずやって来ると。

パウロは御子によってもたらされる全体の和解、そのすばらしさに関して述べた後で、今度はその焦点を少ししぼっていきます。全体ではなくて、今度は個々人に当てはめて、キリストにある和解とその和解のすばらしさをコロサイの人々に語っていくのです。全体から個々人へ、21節は「あなたがたも」と始まっていました。21-23節にかけて、パウロはキリストの十字架がもたらすその和解について、内容やすばらしさを四つの要素に分けて教えてくれていました。きょうは二つ、来週また二つを見めます。神様との関係が修復されるということ、その和解の喜びを、私たちも改めて自分のこととして考えてみましょう。このみことばが、いま一度キリストが十字架で成し遂げたみわざのすばらしさを考えて、それに心から感謝し、賛美する者として私たちが成長する助けになることを心から祈っています。

○キリストの十字架が成し遂げた和解とは：

では、早速キリストの十字架にある和解について、一つ目の要素を考えてみましょう。

1. 和解の必要性 21節

一つ目の要素は和解の必要性です。21節を見ると、「あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となつて、悪い行いの中にあつたのですが、」と続いていました。

●救われる前の三つの状態：

パウロはここでコロサイの信仰者たちにかつての姿を思い出させていました。彼らがまだキリストを知らなかった時のこと、救われる以前の和解を必要としていたその状態にまず目を向けさせていたのです。そしてその状態を、パウロは三つのことばを用いて表していました。21節に三つのことばが出てきます。一つ一つ注目して考えてみましょう。

1) “神を離れ”

まず21節、一つ目のことばが「あなたがたも、かつては神を離れ」と出てきていました。救われる前の者はみんな神様から離れた状態にあつたと言うのです。ここで使われている「離れ」ということばは「何かから引き離されている」とか、「遠く離れている」といった意味を含んでいます。また、そこから「見知らぬ人」や「よそ者になる」ということも表します。関係が立ち切れているということです。実際にこれと同じことばは、この箇所を除いてあと2カ所、新約の別の箇所で登場していますが、そこではこんなふうに使われていました。エペソ2：12に「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」と。「除外され」が同じことばでした。またエペソ4：17-18を見ると、「：17 そこで私は、主にあって言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。：18 彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。」とあります。「遠く離れています」というのが同じことばでした。除外されている状態、遠く離れている状態、これがキリストを知らない者のありようでした。神様からただ少しか一時的に離されているわけではありません。その関係が少しこじれているのでもありません。その関係が完全に絶たれ、遠く離されているのです。救われる以前の者はみんな例外なく、すべてのものを創造されたいのちである神様から切り離されてきました。

救われる以前のすべての者たち、私やあなたは、そもそもなぜ神様から遠く離されているのでしょうか？それは聖く正しい神様が決して罪と関わりを持つことのできないお方だからでした。聖書はそのことをはっきりと教えています。ハバクク1：12-13を見ると「：12 【主】よ。あなたは昔から、私の神、私の聖なる方ではありませんか。……：13 あなたの目はあまりきよくて、悪を見ず、労苦に目を留めることがで

きないのでしょうか。」と書かれています。また、イザヤ59：1-2にも「:1 見よ。【主】の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。:2 あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」とあります。すべてにおいて完全な神様にとって、罪はそのまま見逃してよしとできるようなものでは到底ありませんでした。聖なる方にとって、どんな小さな汚れであろうと、赦されるものでは当然なかったのです。必ず正しいことをなさる義なる神様の前に、罪はどんな些細なものであろうとも問題でした。それは私たちと神様との間の仕切り、隔たりとなる深刻な問題でした。だからこそ、この罪の問題が解決されなければ、罪を持つ私たちはだれひとりとして永遠に神様から引き離された状態にとどまっていたのです。罪を持った者は聖く正しい神様の前に立つことはできませんでした。しかし、それだけが救われる前の者の状態ではありませんでした。

2) “心において敵となって”

次に、「心において敵となって」とありました。キリストを知らない者は、神様から離れていただけではなくて、神様に逆らって歩む、まさに敵の状態にあると言うのです。ここで用いられていた「敵」ということばには、「忌み嫌う」とか「憎む」といった意味も含まれています。つまり救われる以前の者はみんな、ただ神様を知らないよそ者であったのではありません。神様を憎む反逆者だったということです。私たちはみんな中立の立場にいたのではありません。生まれながらの人間はみんなみずからの意思で、創造主である神様を忌み嫌って、敵として生きていたのです。私たちの思いはいつも神様に逆らうもので、私たちの考えはいつも神様を拒むもので、私たちの願いも動機もいつも神様に逆らったものでした。キリストを知る前は、すべての者が、私やあなたも例外なく罪によって汚れていました。すべての者が神様に逆らう敵だったのです。それが揺るがない事実でした。

これを聞いて、ある人は思うかもしれません。いや、私は別にそんな神様に逆らおうなんて思ったことはありません、これまで神様の敵として生きてきた心当たりもありませんと。でも聖書はそうは教えていませんでした。聖書ははっきりと、すべての者が神様を愛そうとも、神様に従おうともしない罪人であることを教えています。そして、そんな罪人に対して、今なお聖く正しい神様が怒りを燃やしていることも教えていました。ローマ1：18-21に「:18 というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。:19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。:20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。:21 それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。」と書いていました。本来であれば、すべての者が神様の栄光を現すために造られたにもかかわらず、みんな造られたものに従うのではなくて、そのものに背いた歩みをするようになりました。創造主にふさわしい感謝をささげて、この方のために生きていこうとはせずに、真理を拒んで自分のために今を生きたいと願って生きるようになったのです。こうして私たちはみずから進んで神様に逆らう者として歩んでいました。例外なくすべての者が心において、神様の敵として生きる状態にあったのです。

3) “悪い行いの中にあつた”

でもそれですべてでもありませんでした。コロサイ2：1節の最後に「悪い行いの中にあつたのですが」と書いてありました。救われる前の者はみんな神様から離れて、心において敵として歩んでいただけでなく、行いにおいても悪に汚れた状態にあつたと言うのです。要するに、内側だけではなく、外側のふるまいも同じでした。心に罪の問題を抱えていれば、ことばだけではなく、私たちの行動にもその影響は必ず現れるのです。イエス様もマルコ7：20-23に「:20 ……「人から出るもの、これが、人を汚すのです。:21 内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、:22 姦淫、貪

欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、:23 これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」と明白に言われていました。またパウロも同じコロサイの中で、神様が忌み嫌われる悪い行いに関して、実際にいくつかの具体的なものを挙げてくれていました。コロサイ 3 : 5 - 8 に「:5 ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。:6 このようなことのために、神の怒りが下るのです。:7 あなたがたも、以前、そのようなものの中に生きていたときは、そのような歩み方をしていました。:8 しかし今は、あなたがたも、すべてこれらのこと、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを、捨ててしまいなさい。」と記されています。

この世は何も問題視しないかもしれませんが。情欲を抱くことや憤りや激しい怒りを表すことや、だれかに悪意を覚えるも確かに間違っているところはあるにしろ、それは仕方がないものだと言口にするかもしれませんが。また、私たちは時にいろいろな場面で言いわけをすることもあります。だれかから間違いや過ちを指摘されれば、すぐに言いわけをして責任を逃れようとしたり、あらゆる手段を用いて自分の身を守ろうとしたりします。その一つに、自分とほかの人を比べようとするかもしれません。あの人より自分の方がましだ、あの人の方が自分よりひどいことをしていると。そうやって人と比べることによって、自分はそんなにひどい人間ではない、自分がしたことは小さな問題だ、大丈夫だと言いついて聞かせて、安心しようとするかもしれません。しかし聖なる神様の前に、罪はどんなものでも罪でした。私たちがどう思うかではありません。私たちの外側だけでなく、心のうちのすべてをご覧になれる方の前では、どれだけ外側をうまく取り繕ったとしても何も隠すことはできないのです。神様の前にすべてのものはみな等しく罪人でした。みことばもこのように述べています。ローマ 3 : 10 - 12 に「:10 ……「義人はいない。ひとりもない。:11 悟りのある人はいない。神を求める人はいない。:12 すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもない。」と記されてきました。義人はひとりもないと、はっきりと記されてきました。神様の前に正しいと認められる人はだれひとりとしていない。すべてをご存じの聖なる神様の前に、この方がご自身の完全な基準で人を有罪だとさばかれるときに、だれもそれに文句を言えるような人はいません。正しいさばきの前には、私たちは言い逃れをすることは決してできないのです。ただすべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するしかありませんでした。これがキリストを知らなかったときのこと、救われる以前のすべての者の状態でした。私もあなたもキリストを知らないときはこの状態でした。

いのちである神様から遠く離れて、みずから進んで敵として逆らい続け、悪い行いの中を喜んで歩んでいた私たちは、本来聖なる神様によってさばかれて当然の存在でした。どう考えても、神様の御怒りを受けるにしか値しませんでした。この世界のすべてを造られた創造主に従うことを拒んでいるばかりか、この方の忌み嫌われることを喜んで行っていたのです。この方を愛するために、この方の栄光を現すために造られたにもかかわらず、私たちは自分たちの栄光を現すために、自分たちを愛して生きていたのです。造られたものが造った方に感謝をささげることもなければ、ましてや造り主の代わりに造られたものを愛して生きていました。間違いなく、私たちは永遠の地獄で滅ぼされてしかるべき存在でした。だからこそ絶対に勘違いしてはいけません。神様が罪人を正しくさばかれるときに、御怒りを注がれるときに、そのさばきは厳し過ぎるものではなくありません。だれひとりとして、神様どうしてですか、不公平ですなどと言うことは決してできません。永遠の滅びこそ当たり前のものでした。いや、むしろそれ以外に値するものなど何一つとしてなかったのです。聖なる神様の前にすべての罪人は、ただ御怒りのみを受けるべき存在でした。私たちの耳にどんなに厳しくて、ひどい話に聞こえたとしても、これが真理でした。揺るがない現実だったのです。

では、こんな私たちにはもう何の希望もないのでしょうか？神様から切り離された私たちには、もうその壊れた関係を修復することはできないのでしょうか？確かに私たちには何もできませんでした。しかし、その問題に対する答えを神様が与えてくださったのです。

2. 和解の手段 22 a 節

パウロは続く22節の前半で二つ目の要素、和解の手段についてパウロは22節で「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。」と述べていました。私たちには決してできなかったことをほかのだれでもない神様が成し遂げてくださいました。敵であった私たちが白旗を掲げて、神様の前に何か喜ばれることをしたからではありません。頑なで遠く離れていた敵である者のために、ただ神様がみずから進んで愛を示し、ご自身のひとり子であるイエス・キリストを世に送ってくださったのです。そしてそんな御子の肉のからだにおいて、死によって和解は成し遂げられました。御子こそが神様と人との間に和解をもたらすことのできた唯一の方法、唯一の手段だったのです。

1) 「御子の肉のからだにおいて」

ここで特に御子に対してパウロが使っている二つのことばに注目してみてください。一つは、「今は神は、御子の肉のからだにおいて」ということばが出てきました。パウロは、このことばを通していったい何を言わんとしていたのでしょうか？これはイエス様が間違いなく完全な人として、実際のからだを持って、この世に来られたことを強調していたのです。完全な神様であるイエス様は、同時に完全な人としてこの地上に誕生されたお方でした。そしてこれはとても重要なことになるのです。なぜ和解を成し遂げるために、御子は人となる必要があったのでしょうか？ヘブルの著者はその一つの答えを教えてくださいました。ヘブル2：14-15、17にこう書いています。「:14 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、:15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。……:17 そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。」と。イエス様が人となられたのは、ほかのだれでもない私たちのためでした。人の犯した罪のなだめがなされるためには、人が身代わりとなる必要があったのです。だからこそ、神様の驚くべき知恵によって、完全な神様が完全な人となってこの世に誕生されました。もちろん人としての性質をすべて持って生まれたこのお方は、私たちとは違って汚れはいっさい持っていませんでした。地上での生涯においても、いっさいの罪を犯すことはありませんでした。この方はすべての人に到底できなかった完全な生涯を歩まれたのです。そんなイエス・キリストこそ完全な神であり、人となってくださった救い主、あわれみ深い大祭司でした。

2) 「その死によって」

でも、この方はただ人となられたお方ではありませんでした。同時に、人として死なれたお方でもありました。それが二つ目に注目してほしいことばになるのですけれども、コロサイ22節の続きに「しかもその死によって」と書いてありました。人となられたイエス様は、ご自分の死をもって和解をもたらしてくれました。罪の為のいけにえとして、みずから十字架で流されたその血でもって罪の赦し、贖いのみわざを成し遂げられたのです。ローマ5：9-10に「:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。:10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」と書いてありました。忘れてはいけません。本来であれば、私たちこそが神様の御怒りを受けるべき存在でした。神様に逆らって生きていた私たちこそが正しいさばきを受けて、永遠に苦しんで当然の存在でした。罪ゆえに死んで、永遠に地獄で滅んでしかるべき存在でした。

しかし、いっさい罪のないイエス・キリストが私たちに代わって十字架にかかって、その血を流してくださいました。私たちが受けるべき罪の罰を代わりに背負って、この方が罪に対する神の御怒りを耐え忍ばれたのです。罪に燃え上がるその怒りの盃は、当然私やあなたの上に注がれるべきものでした。しかし、それをキリストが十字架の上で代わりに飲み干して、その怒りをなだめてくださったのです。この方が代わりに苦しんで、この方がいけにえとして死なれたからこそ、その大きな犠牲を通して、この主を信じる者に神様は罪の赦しを与えてくださるのです。イエス・キリストこそ、どうすることもできなかった罪の問題を解決することができた唯一の手段でした。ただ、この主の十字架のみわざによってのみ壊れた関係を修復することができました。これがほかのだれでもない神様が私たちに示してくださった一方的な恵みだったのです。

だからこそ改めて考えてみてください。果たして私たちは今、この主の成し遂げてくださった救いのみわざにいったいどれだけ感謝しているのでしょうか？自分たちがかつて置かれていた状況を振り返るときに、この救い主のなされたことをどれだけ心から喜んでいるのでしょうか？この救い主を何よりも愛して、すべてのことにおいて信じ従っていきこうとしているのでしょうか？それとも当たり前ものになってしまって、救いも自分にとって当然のように考えていないのでしょうか？救い主以外のものを自分の大切なものとしていないのでしょうか？この方に対する感謝や喜びは強まっているのでしょうか？それとも薄まっているのでしょうか？みことばが明らかにしてくれることは、救いのうちに当たり前の部分の一つもないということです。私たちはみずからの意思で神様に逆らって、敵として歩んでいました。こんな私たちに對して、救いの手が差し伸べられることなんて到底あり得ないのです。また、敵として歩んでいた罪人のために、神の御子であるイエス・キリストはご自分をまさに無にして、人として来てくださったのです。この方は無力なひとりの赤ん坊として生まれて、さまざまな弱さや苦しみを味わい、遂には十字架にかかって死なれました。キリストは、いったいどれほど大きな犠牲を払ってくださったのでしょうか？滅びにのみ値する敵のために、どれだけご自身をへりくだらせたのでしょうか？もし測り知れないその恵みが、そのすごさがあまり見えていないのであれば、立ち止まって一緒に考えてみてください。私たちは、この数週間にわたって15節から御子についてパウロが教えていることを繰り返し見てきました。御子は単なる力のない存在ではなかったのです。この方は天にあるものも、地にあるものも、見えるものも見えないものも、すべてのものを造られた創造主でした。何にもまさって偉大な造り主でした。そんな測り知れない力を持ったお方が、人を造られたそのお方が、造られた人と同じように血と肉を持つ者になられたのです。

この方は永遠の初めから変わらずに存在しておられるお方でした。70年、80年、90年で寿命を迎える私たちのような者とは全然違うお方です。変わらずにいつも存在し、すべてのものをご自分の意のままに支配することもできる主権者でした。そんな力強いお方が疲れや飢えや弱さを覚えるものになられたのです。この方は死者の中からよみがえられました。死の力も罪の力も絶対にどうすることもできなかった、私たち人間とは違って、この方はその中からよみがえり、すべてのものにまさる最高の勝利者となられたのです。でもそんなすべての中で第一のお方が辱めや迫害に遭われ、人々からののしられ、苦しみ死なれたのです。いや、ただ死んだのではありません。いっさいの罪もない、完全でいつも正しい神の御子が、すべての権利や力を持っておられる栄光に輝く王の王であるお方が、十字架の上で死なれました。いったいどんなにこの方ご自身をへりくだらせたのでしょうか。どんなに本来値しない痛みをその身に受けて、みずからを犠牲にされたのでしょうか。本来であれば、この方は神様として扱われて当然のお方でした。イエス様は初めから変わらない神様だったのです。すべてのものに当然値するお方でした。しかし、それらの権利や特権をみずから横に置いて、本来絶対に値しないような扱いを受けながら、みずから進んで十字架にかかり、救いのみわざを完成してくださったのです。私たちにはどうすることもできなかった罪の問題を、本来であれば受ける必要もない苦しみや恥を味わって、神の御子

が犠牲を払って解決してくださいました。そんなキリストの十字架を通して、かつて神様から遠く離れ、みずから進んで敵として逆らい、悪い行いの中を歩み続けていた私たちは、この主を信じる信仰によって、神様と和解することができたのです。ただ神様の一方的な愛とあわれみによって、私たちは神の怒りから救われたのです。

だとすれば、皆さんひとりひとはこれを聞いてどうでしょう？私たちは救われる前のすべての人が持っている問題について、そしてその問題に対するイエス・キリストの十字架にある和解をきょう一緒に考えてきました。聖書が教えてくれているこのすばらしい知らせに対して、あなたはどうか応答するでしょう。もしまだ今この方を自分の救い主として知らない方がいるのであれば、神様を信じていない方がいるのであれば、神様を自分の主人としていない方がいるのであれば、よく知っておいてください。そんなあなたは今なお神様から遠く離れ、神様に逆らう敵として生きているということです。そしてそんなあなたは、今まさに一日一日永遠の滅びへと近づいています。聖く正しい神様の前に立つ日は必ずやって来ます。でもまだ救いはあります。だからきょうというこの日、私やあなたのような罪人のために、自分のいのちをささげてください。あわれみ深い方のそのあわれみを求めてください。自分の罪深さを認めて悔い改め、主イエス・キリストを自分の救い主として、また、自分の主人として信じ、受け入れてください。だれも自分自身を救うことのできる者はいません。壊れた関係を自力で修復できる人はひとりもいません。どれだけ良い行いをしようとも、私たちはみずからを救うことは決してできないのです。だからこそ唯一救いを与えることのできるそのお方に、イエス・キリストに、自分の身をすべてゆだねてください。ただ、キリストの死と復活によるその罪の赦しを求めてください。あり得ないほどの犠牲を払って、喜んで十字架の死にまで従われた偉大な救い主を、あなたも心から信じるのであれば、救いは与えられると神様は約束してくださっています。そんな偉大なお方を自分のこととして知ってください。この方のうちに本当の喜びがあります。この方のうちにのみ救いがあります。

また最後に、もうすでにこの救い主を自分の主として歩まれている兄弟姉妹の皆さん、改めて自分自身に問いかけてみてください。もし私たちにイエス・キリストがいなければどうなるでしょう？もし私たちが自分の願うすべてのものを本当に手に入れたとしても、イエス・キリストがなければどうなるでしょう？私たちにはいっさいの希望はありませんでした。だからこそ覚え続けることです。神様の前に、私たちがかつてどんな存在として生きていたのか、そしてそんな私たちに、どれほど大きな愛とあわれみを神様が示してくださったのかをです。死んでいた私たちは、キリストとともに今を生きる者となりました。遠く離れていた私たちは、キリストによって神の子どもとされました。罪によって滅ぼされるべき私たちは、キリストによって罪を赦され、新しく生きる者へと変えられたのです。私たちではありません。私たちのために来てくださったその救い主が、それを成し遂げてくださいました。すべて神様が成し遂げてくださいました。だとすれば、私たちににとってキリストとその十字架以外、何か宝とするものがあるのでしょうか？この救い主を覚えて感謝をもって、ともにこの主をほめたたえる者として続けて歩んでいきましょう。